

## 第199回地震予知連絡会重点検討課題について

タイトル「日本海で発生する地震と津波」

趣旨説明者 北海道大学 地震火山研究観測センター 谷岡勇市郎

2011年3月11日にM9.0の東北地方太平洋沖地震が発生したことを受けて、地震予知連絡会では、重点検討課題として、巨大地震の発生原因等について検討してきた。第190回、191回、193回では「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」についての検討が行われ、第192回、194回、195回では「プレート境界に関するわれわれのイメージは正しいか?」と題して、南海トラフ・南西諸島海溝、千島海溝、相模トラフ・首都圏直下におけるプレート境界に対する現状の考え方について整理・検討を行ってきた。

そこで第199回地震予知連絡会では、残された日本海側の巨大地震や津波について議論することとなった。日本海東縁部では過去にM8クラスの巨大地震が幾度も発生し、その津波による被害も甚大であった。その日本海東縁部では、プレート境界が南北方向に分布する何条かの断層・褶曲帯(ひずみ集中帯)より成り、幅をもった領域全体で圧縮力によるひずみを解消するものと考えられている。そのため、陸域から海域にかけて地下構造は複雑で、震源断層の分布も複雑になると考えられている。それらを理解するために、「ひずみ集中帯の重点的調査観測・研究プロジェクト」が立ち上がり、最近多くの成果が得られている。

今回は、現在までに得られた、日本海東縁部での最新の陸・海構造探査の成果、地殻変動観測による成果、海底地形・海底地質調査結果、最新の津波堆積物調査結果、さらには歴史地震の成果のまとめから、日本海東縁部で発生する大地震の震源断層に対する理解を深めることを目的とする。